

未来をつくるもの ～土木×2+人～



渡辺弘子
論説委員
月の泉技術士事務所（代表）

－「土」＋「木」＝「？」－

土木という漢字を素直に分解すると「十一・十八」となる。11月18日の「土木の日」の由来の一つともなっていることはご存知のとおりである。では、土木という漢字を合体させると何になるか。様々なパターンが考えられると思うが、私はそこに「人」も加えて「未来」としたい。「土+木（末）・土+人+木（来）」である。

－自然災害年だった 2018 年－

日本は災害列島とも呼ばれるが、2018 年は特に自然災害の多い年であった。1月の草津本白根山噴火（噴火警戒レベル3）に始まり、2月の福井豪雪（『平成30年豪雪』、1981年『五六豪雪』以来37年ぶりの豪雪記録）、3月の霧島山新燃岳噴火（噴火警戒レベル3）、4月の島根県西部地震（最大震度5強）、根室半島南東沖地震（最大震度5弱）、5月の長野北部地震（最大震度5弱）、6月の大阪府北部地震（最大震度6弱）、7月の西日本豪雨（『平成30年7月豪雨』）、日本歴代最高気温（41.1℃）を記録した猛暑、8月の台風15号から19号までの観測史上初となる連続5日間の発生、9月の台風21号、24号による観測史上1位となる暴風、北海道胆振東部地震（最大震度7）と毎月続いた。10月以降は激甚と言われるほどの災害は収まったものの小さな災害は各地で発生している。日本のみならず世界的に頻発する近年の自然災害の多さ、激甚さをみるにつけ、土木とは人々の命と財産を守り、生活の根幹を支える技術だと改めて思う。

－明治 150 年だった 2018 年－

そして、2018 年は明治 150 年でもあった。明治時代、土木という学問は優秀な人材の集まる場だった。土木の偉人と言われる近代の技術者たちは、日本という国を造ることに情熱をかけていた。若き日の古市公威が留学先で「ぼくが一日休むと、日本は一日遅れます」と言った逸話は良く知られている。その古市は後年、土木学会の初代会長となり、就任演説で「土木は機械、電気、建築と密接な関係あるのみならず」「本会の研究事項は工学の範囲に止まらず

...工芸経済学...土木行政法...工業衛生学...なお外にどのくらいあるかわからない」と述べた¹⁾。土木は工学のみならず、文学や歴史学、社会学さえもその範疇に含む総合的な学問であり、若い技術者が人生をかけて取り組む熱い社会事業でもあった。パナマ運河工事や荒川放水路事業に従事した青山士は「私はこの世を私が生まれてきたときよりも、より良くして残したい」と言い²⁾、その師であるクリスチャンの廣井勇は「(工学)によって数日を要する所を数時間の距離に短縮し、一日の労役を一時間に止め、人をして静かに人生を思惟せしめ、反省せしめ、神に帰るの余裕を与えないものであるならば、我等の工学には全く意味を見出すことができない」と言った³⁾。

－希望の未来をつくろう－

1世紀半が経つあいだに土木に対するイメージはいつのまにか変わり、多くの一般市民にとって負のイメージが強くなった。人々の命と生活を守るという土木の心が、インフラ整備という衣によって見えにくくなったことが原因の一つかもしれない。土木インフラは、それがなければ生活が不便になり災害時には生命の危険があるにもかかわらず、健全に機能している時にはその存在さえ気づかれにくく、支障が生じた時にのみ瑕疵として受け取られ非難されやすい。だが、土木インフラのユーザーは実はその一般市民である。防災に限らず、土木インフラの存在意義や機能をユーザーが知らねば、インフラの機能を最大限に発揮させることは不可能である。人々の命と生活を支えているものが土木インフラであり土木技術であることを、私たち土木界に身を置く者は繰り返して伝えていかねばならないだろう。

国土交通省は3K（きつい・汚い・危険）に代わる新3K（給料・休日・希望）を提唱し、建設業の魅力を高める取り組みを開始した。若者の入職や女性活躍だけがそのターゲットではないはずだ。そこで働く老若男女が希望を感じられ、誇りを持って仕事にあたる土木界であってほしい。一般市民が土木技術の重要性を再認識する機会を得る場であってほしい。そうあるべく土木界をあげて尽力していかねばならない。未来は人と土木でできているのだから。

1) (公社)土木学会：古市公威土木学会会長就任演説

<http://jsce100.com/furuichi/fulltext01.html>

2) 高崎哲郎：評伝 技師 青山士，鹿島出版会，2008年

3) 高崎哲郎：山に向かいて目を挙ぐ 工学博士・広井勇の生涯，鹿島出版会，2003年